

凡聖の音沙汰なき本果の眞面目を會取せよと道うて居るのぢやけれ共、聞く耳を以て居ないものと見えて、一向親しく見所を呈し來る所の者がない、斯くまで此方が丁寧に口宣して居るにも拘はらず、今尙ほ一人半箇も承當致しました、會取致しましたと云ふものが現はれて來ない、併し承當したり會取したりする者があるかしら、若し會、不會の沙汰があつたら空劫以前ても未出世以前てもあるまい、一箇も半箇もないのが本當であるかも知れない、十ニ支の中に驢年といふは、無いから幾千萬年経つても來ることはあるまい、若し萬が一その驢年が來つたにもせよ、魯祖を見たりやうに只面壁して許り居たならば逆もく一人半箇も學人を接待し去る様なことはあるまい：」

何だか魯祖を貶斥せられた様に聲ゆるが、是れは南泉和尙が魯祖の爲め且つ諸人のために一線路を通じられたのである、何故かといふに、其の面壁打坐の當





體が此身此儘、空劫以前に承當し、諸佛出世以前、父母未生以前の自己を會取して居るからの事ぢや、是が即ち迷悟情量の邊際を超脱した非思量不可得の正當面ぢや、三昧王三昧の當體ぢや。

### 片岡我童に聽け

或る日の事であつたが、法眼和尚のところへ二僧が參禪した。すると法眼は何とも云はずに、手を以つて簾を指した。すると二人の坊主が法眼の指した簾をスル／＼と捲き上げた。此の捲き上げた容子はよいが、仲々これには仔細がある。すると法眼はこれを見て、

「二は得たり、一は失せり」

「二人は好いが、一人は悪いと云つた。何う悪いか、一つうなつて見ようか。」  
曰く、

鼻の脛短しと雖も是を斷たば憂ひなん、鶴の脛長しと雖も是をつがば悲しみなん、民を制すること此の理に等し。

此の阿古屋の文句が解らなかつたら、片岡我童へも行つて三曲でも聽いて來るがよし。



黄蘗宗高津伯樹禪師題讚



文僊畫

— 矢古島源一郎氏藏 —



下篇 拈丁也



### 薬山陞座の話

薬山久不陞座。院主白云。大衆久思。示誨。請和尚爲衆說法。  
 山令打鐘。衆方集。山陞座良久。便下。屢飯。方丈。主隨。後問和  
 尚。適來許爲衆說法。云何不垂言。山云。經有經師。論有論師。  
 爭怪得老僧。

薬山和尚は達磨大師よりは九代、六祖大師よりは四代の祖師で、惟儼と云ふ  
 青原下の方である。素より達磨門下であるから、世の經論師の如く、名相を  
 分別するやうなことはしない。然らば名相佛法を知らないのかとすると、知つ  
 て知つて知り抜かれたから、其んなものを何時までも珍重しては居られぬ。そ





れかあらぬか、藥山和尚は滅多に高座に登つて説法をしない。和尚が餘り久しく説法しないものだから、院主和尚が自ら方丈に登り、

「ドウか合山の大家が、久しく御垂誠を熱望して居りますから、何うぞ御説法を頼みまする。」

と云つた。藥山も院主があまりネダルものぢやによつて、止むなくそれでは説法して聴かさうからと鐘を打たしめた。サアいよ／＼和尚の説法があると云ふので、合山の大家が一時に法堂法座の前方へ整列した。然るに藥山は高座に登り、ヂツと四方を見下し、サツサツと方丈に歸つて仕舞つた。此處が藥山の眞の説法であるけれども、誰れもそれを看破するものが無かつた。正直な院主は和尚が高座に登つて説法もせず暫く突つ立つたまゝ歸つたので不思議に思ひ、その後を追ひかけて、

「和尚は前に説法すると約束しながら、何故一言をも云はぬのであるか」

藥山は憐兒忘醜して、わざ／＼陸座良久までもされたものを、如何に無眼子の院主だからとて、實に馬鹿正直にも程がある。時に藥山は徐ろに院主を顧みて、「お前そのやうに老僧をいぢめて貰ひますまい。老僧はたゞ如來の佛心印を傳授するのが目的である。世の經論師のやうに、佛の舌頭に乗つて無駄口を利くのが役目ではない。無駄口が聴き度いのなら、すぐ送行して彼の經論師の門にでも投じた方がよろしい。さうすれば、立板に水のやうな説法がいくらでも聴かるゝワ。老僧が説法せぬからと云つて、何も怪むには及ばない」と云つた。實に此の答へは寒清骨に入りて眠を成さずと云つたやうに、痛快な言葉だと思ふ。



### はア有りがたいで一生終る

昔、有難與兵衛と云ふ人があつた。本名を小山壽信と云つて、心理学を究めて居た。常に人生を達觀して居たから、僅かな事にくよくよ思つて腹を立てると云ふやうなことは決してしなかつた。先づ朝早く起きて兩親の顔を見ると、『はア有りがたい』と云ひ、妻子の顔を見ても、隣家の人に接しても毎時も、『はア有難い』と云ふ、『己れ不幸にして昨夜死せば、親にも、子にも、妻にも、隣人にも斯う

して今日は遇はれまいに、今日斯うして遇ふことの出来たのは、實に有りがたい次第である』と思つたのであらう。或る夏の日、所用ありて友と共に外に出て、急に夕立雨に遇つたので、急に家に歸らうとして、石につまづき、打ち倒れて、ひどく膝頭の皮を摺りむいた。すると、

『はア有難い』

と云つたので、友は、

『膝頭に怪我をしながら何が有難いのであるか』

と問へば、

『足を折つて跛者となつても致し方がないのに、摺りむいただけで濟んだとは、はア有りがたい次第』



と答へたと云ふが、又、或る時、隣村の祭禮に赴いて、人混の中で他人に打ち當り、額に瘤を出来したが、例の

「はア有りがたい」

をやつた、すると先きの人は、

「無禮者め、人に打ち當りながら、はア有難いとは何事だ」

と叱責すると、彼は平然として、

「はい、是れは私の癖で御座りまして……」

と云へば、先方では益々立腹し、

「癖とは何事だ、貴様は一體何者だ」

と申しますと、

「はい、小山壽信と申します。どうぞお許しを……」

と云へば、

「成る程、それでは貴殿は隣村の小山壽信と申さるゝ仁か、夫れならば宜しう御座る」

と云つてさつさと往つて仕舞うた。すると壽信は額の瘤を撫てながら、

「はア有り難い」

と云つて喜んださうである。何事につけても「はア有難い」の一語によつて萬事を解決し、超然として其の日を送つた小山壽信の如きは、最も人生を達觀したものと云はねばなるまい。

### 青原米價の話



僧問、青原如何佛法大意。  
原云、盧陵米作麼價。

一僧あり、青原和尚に向つて問うて曰く、

「世尊出世の本懐、達磨西來の端的は、何んなもので御座りませうか」

此の僧餘程のソレ者と見えて、五時八教だの、禪定解脱だの有無迷悟だのと云ふコザくしいことを問はず、佛法極妙のところを問うたのは實に偉いものである。時に青原和尚答へて曰く、

「尊公は盧陵縣の者だと云ふことだが、近頃の米の相場は如何なものであらう」まさか青原和尚ぢやからとて、米相場師でもあるまい。實にへんなことを質問したものである。然し此の答語には一向に禪臭が無く、スラ／＼したものである。特に盧陵と云ふ地名を出したのは、此の僧は盧陵縣の人であるから、強ひ





て斯う云つたものに相違無い。我が日本にも之れに似た話がある。彼の有名な  
る乞食桃水禪師に平素參禪に心を寄する一信徒が

「參禪の極意は如何」

と云ふと、禪師はしばらく天井を詠めて居たが、

「去らばて御座る、醬油は土用の内に造り込むもの、味噌は寒中に作り込む  
のて御座る」

と答へた。實に禪の桶底を脱した人は、機に臨み變に應じて活機を應用する。

### 白隠和尚と豆腐屋の娘

白隠和尚と云へば、誰れも知る通り有名な禪宗の坊さんである。恰度、白隠  
和尚の住んで居る寺の前に魚屋があつて、其家の主人は大層和尚を崇拜し、生  
佛のやうに思つて居た。さて、其の魚屋の娘が近所の若い者と不義なことをし  
て子を産んだ。お親爺さんはそれを見て、娘に厳しく其の相手を問ひ糾した。  
娘は事實を打ち明けることも出来ず、遂思案に餘つて、悪いことゝは知りなが  
ら、

「實は和尚さんに……」

と蚊のやうな聲で言つた。これを聞いたお親爺さん、大に立腹して、今の今ま  
て生佛とばかり思つて居たのに、そんな不了見な糞坊主であつたかと、早速子  
供を抱いて白隠和尚の處に馳け付け、悪口雑言の有りたけを盡して、そして子  
供を引き取れと言つた。和尚はニコ／＼笑ひながら、



「ア、さうか」

とたゞ一言云つたのみで、あとなく子供を引き取つた。ところが後日になつて、娘の云つたことは實は虚で、真との相手は近所の若いものであつたことが分つたので、お親爺さん吃驚して慌て、又和尚のところへ馳け付け、先日の無禮過言をヒタ謝りに謝つた。和尚は一向氣にも止めない様子で、

「ア、さうか」

と一言云つたのみで、子供を返して寄越したと云ふ話がある、其のかゝはりのないこと、宛ら春風のソヨ／＼と吹くやうではないか。

### 仰山挿鉄の話

瀧山問「仰山、甚處來。仰云、田中来。山云、田中多少人。仰挿鉄下。鉄子又手而立。山云、南山大有人刈菰。仰挿鉄子便行。」

瀧山の靈祐禪師が仰山の惠寂禪師に向つて斯う問うた。

「甚れの處よりか來る」

問ひは平々凡々たる問端のやうに見えては居るが、決して平凡ではない。故に仰山もウツカリした答へは出來ぬ、

「衲は米田から歸つて來た」





瀧山は如何にも人煙を絶した山中であるから、仰山は米麥を作り田畑へ行つて、今歸つて来た途中と見える。モウ以上のところで、問答は立派に出来て居るのだけれども、瀧山和尚は再勘辨を試みた。

「さうか今田から歸つたか、それでは今日は汝一人であつたか、それとも多勢の者と同業であつたか」

と問うた。仰山は丁度其の時鍬子を田中から擔ぎ來られたものと見え、それを地上に挿み直立て、手に一物も執らず、その庭上へ屹立された。これを見るや瀧山は間に髪を容れず、

「イヤ聞く所に依れば南山には大勢の人が有つて、芥を刈つて居ると云ふことぢや、尊公も亦そんなに偉ぶらず、中庭に出て草取りでもしたら何うぢや」と云ふ。さすがは仰山和尚、耳が敏い。なるほど自分は今まで百尺竿頭の邊に



へばり附いて居ると気が附いた。それでも何とは云はずに、その地上に挿んだ鍬子を以て早速何處へか行かれた。その去處は何れてあらうか。大方また彼の田中に行き、和泥合水して心田を耕耘するつもりと見える。

### 西郷南洲の剛復壯心

南洲、西郷隆盛の剛復壯心なりしことは何人も知る處であるが、佐久間貞一、人見寧、梅澤敏の三士、事に依りて西郷を刺さんとし、勝海舟に紹介状を頼んだ。そこで海舟は、  
「佐久間、人見、梅澤の三士は幕臣なり、今般、足下を刺殺さんとして遠く錦

地に行く幸に接見の榮を三士に與へられよ」

と云ふ意味の紹介状を渡した、三士この状を以て其の地に到り西郷を訪ふ。時恰も三伏の炎暑の候なりしが、西郷家の玄關には諸肌脱ぎし肥大漢が横臥してゐたので、すぐ紹介状を渡して、

「何卒、先生に御取次を」

と云へば、裸漢、

「ハア、吉之助は俺ぢや」

と云うて、三人を奥の一間へ通したが、紹介状を一讀して、

「卿等は俺を刺しに來られたさうぢやが、遠路どうも御苦勞ぢやつた」と云はれたので、三士色を失つて早々に逃げ歸り、海舟に告げて曰く、  
「どうも西郷と云ふ人は大人物で刃がたくなかつた」





刺客を前に立たせて平然「俺が吉之助ぢや、遠路御苦勞」と云つた西郷の  
 眼中には生死はない。既に眼中に生死なく、人生は苦てあらうが、樂てあらう  
 がそのやうなことには毛頭頓着しない。吾等は南洲の如き達觀的度量が無けれ  
 ばならぬ。

### 地藏種田の話

地藏問「脩山主、甚處來。脩云南方來。藏云南方近日佛法如  
 何。脩云商量浩浩。地藏云爭如我。這裡種田搏飯喫。脩云爭  
 奈三界何。藏云爾喫甚麼。作三界。」



地藏院圭琛禪師は、玄沙志備禪師の法嗣、大法眼禪師の本師である。此の圭琛禪師のところへ一日脩山主が參禪に來た。圭琛禪師忽ち是れを認めて、

「何處からヤツテ來た」

と一問した。此の一問は恐ろしい探竿であるが、脩山は一向其れに氣が附かず

「ハイ南の方から來ました、」

と答へた。脩山主が餘りに正直に答へたから、其の言葉尻を引つ捕へ、

「衲も管ては湖南の方へ行脚したこともあつたが、その湖南から來たとは懐かしい、近頃の佛法は何んなものぢやな」

脩山主曰く、

「イヤ何うも勿々、佛法の商量が盛大なもので御座る」

と勢込んで云ふので、圭琛禪師は忽ち其の出鼻を抑へ、

「なるほど左様な、お手前は夫れが佛法の繁昌な印だと思つて居るか知らぬが、我が門下に於ては、そんな問答は絶えてやらぬぞ。只、毎日田を耕し畑に植ゑて、自ら食ふことをやるばかりだ。それが我が門下の禪風ぢや」と嘲つた。すると脩山主が

「そんな氣樂を云ひなさるが、それで何うして三界を出離されるおつもりですか」

と詰問した。圭琛禪師これ聞き、

「其方は三界出離を何うするかと云ふが、全體ドンなものが三界だと云ふのぢや衲などには一向その三界と云ふものが目に見えぬ、若し三界と云ふものがあるならば、山僧の面前に呈露して見よ、」

と云つて、脩山主をして出身の活路なからしめた。



### 演若達多自分の頭を見失ふ

瑞岩と云ふ和尚は、自分の修養時代に、何時でも

「主人公は宅に居るか、居るかヤロイ」

と自問自答したと云ふことは、禪門で有名な逸話になつて居るが、世間では自分の心を不在にして居るものが澤山ある。自分の心を不在にするのはまだよいが、身體までも不在にして居るものがあるから驚かざるを得ない。釋尊の在世の頃、演若達多と云ふ坊さんがあつた。此の坊さん大分シヤレ氣があつたと見えて、朝早く起きて法堂へお經を讀みに行く前に、必ず一度鏡に向つて自分の

顔を化粧するのを常として居た。ある時、例の如くムツクリ床から飛び起き、鏡に向つたが自分の顔が寫らない、演若達多遂に泣き出しさうな顔をして、「オイ、おれの頭は何處へ行つた、戀しの頭や」と云つて、方々を訪ね廻つた。無いのも道理である、彼は餘りにウロタへた結果、鏡の裏に向つて自分の顔を寫したのであつた、斯くて演若達多は大衆の笑を買つたが、心を不在にする連中は、大抵此の類だ。

### 夫婦喧嘩の仲裁

或る所の菓子屋で夫婦喧嘩をやつた。此の夫婦は毎度喧嘩をするが、今度は



激しい、亭主は嬬を殺すと云ふし、嬬は殺されると云ふ。殺す殺されると云ふので大喧嘩をして居る、嬬を殺すのも殺生だ、捨てゝも置けぬとあつて隣の主人が仲裁に行つたが、菓子屋の亭主が云ふには、

「何時も喧嘩をして御厄介をかけますが、今日の喧嘩は違ひます、今日は本當に嬬の奴を殺さねば置かぬ」

嬬が云ふには、

「お前は何時でも殺す／＼と云ふが、今日は本當に殺せるなら殺して見るがよ

』

と云ふ。隣の主人も色々に止めて見たが、諾かんから、俺が是程まで云つてもきかんとあれば仕方がないと云つて、店の方へ行つて店頭にある菓子を掴んでは、其所等に集つて居る子供等にドシ／＼撒いてやる、

「サアお前方此のお菓子を皆やるぞ、見物の子供に皆やるぞ」

といふ。所が喧嘩をして居る夫婦がそれを見て驚いた、

「モシ／＼隣の旦那、そんなことをして貰つては、明日から商賣が出来ません」と云ふ。隣の主人は、

「之れは怪しからん、お前はおかみさんを殺すと云ふぢやないか、人を殺せば自分も死なねばならぬぞ、夫婦死んでしまへば此の家も今日限りだ、お前方の死後の追善の爲めに生前に功德をして置いたら好からうと思つて、今施しをして居る所だ」

と云はれて、夫婦の者も、喧嘩を止めたと云ふ。是れも心を不在にした一例として面白う。



# 雲門須彌の話

僧問「雲門」不起一念、還有<sup>レ</sup>過也。門云、須彌山。

若し眞に一念不起であるならば、罪過の有無を問ふまでもないことだが、其の實は一念萬念罪過彌天である。一僧が曾て趙州禪師に、「二物不將來の時如何」と問うたれば、趙州禪師が「放下着」





と答へた。スルと其の僧がまた

「一物不將來箇の何をか放下せん」

と理窟を並べたれば、禪師が

「恁麼ならば擔取去れ」

と云はれた。この僧も前の例話と同じやうな病にかゝり、一物珍重して居る。

それで雲門和尚に向つて、

「クラツと晴れて、一つの妄想も起らない時でも、缺點があるか」

と問うた。すると雲門和尚は

「あるともあるとも、須彌の山ほどの罪過があるぞ」

と問僧の胸に打ち付けられて居る釘楔を抜き取つてやらん爲め、安住不動の妙

高山を問僧の面前に放離出して見せたのだ。この一大須彌山は上は天を挂へ、

下は地を挂へて居るから、八風吹けども安住不動である。この須彌山をさへ坐らして居らうものならば、どのやうに念起念滅の風が吹き来らうとも何ぞ之れを憂ふるに足らんやである。

### 盤珪禪師と癩癩持

或る坊さんが盤珪禪師のところへ行つて、

「私は生れつき短氣で癩癩持ちて困ります」

と云つた。すると禪師は、

「お前はエライ物を持つて居るな、それでは一寸その癩癩といふものを起して



見せては呉れぬか」

と云ふ。坊さん曰く、

「チヨツと今夫れを起す譯には行きませぬ」

と云ふ禪師曰く、

「何時になつたら起さるか」

坊さん曰く

「ヒヨツとすると起ります」

禪師曰く、

「それぢや生れつきではあるまい、生れつきならば何時でも出ねばならぬ。それはヒヨツとすると起さるのではない、ヒヨツと起すのである。自分で生れつきと思ふは、親が短氣や痲癩に産み附けて呉れたといふことになる。夫れ

は以ての外の親不孝である」

と云つて叱られたと云ふが、吾々の心の奥に在る心は、釋迦も孔子も同じ所の佛性といふ立派な鏡である。其の鏡を見附け出して、眞の我れを尋ねて行くのが根本的修養と云ふものである。

### 臨濟瞎驢の話

臨濟將示滅。囑三聖。吾遷化後。不得滅却吾正法眼藏。聖云。爭敢滅却。和尚正法眼藏。濟云。忽有人問汝。作麼生對。聖便喝。濟云。誰知吾正法眼藏。向這瞎驢邊滅却。



臨濟義運和尚は、黄檗の義運禪師に三度佛法の大意を問ひ、三度共に打たれたけれども、未だ機縁が熟せなかつたものと見え、大事を發明する場合に至らなかつた。遂に辭して黄檗禪師の指揮に依り、高安大愚の所に行き、問答の結果遂に機縁が熟した。かくて再び黄檗の許に歸りて嗣法し、唐の十八代懿宗帝の咸通八年四月十日に入寂した方である。此の臨濟がいよく臨終に臨み、豫て法藏を付囑せる三聖の慧然といふ弟子に法藏付囑の披露をした。そして云ふには「吾が正法眼藏を滅却してはならぬぞ」

正法眼藏は人々具足個々圓成底のものであるが、迷へるものはこれを知らずに居る。それで臨濟は最後まで是れが氣が、りてあつたものと見える。三聖曰く、

「イヤどう致しまして、已に法藏を付囑したからには、何て之を滅亡させるや





うなことを致しませう。其の邊のことはチャンと納が承知して居ります  
故、御安心して御遷化あれ」

と赤心片々紅涙袖を濡ぼすの感がある。臨濟曰く、

「尊公は此方に向つて、其のやうに手丈夫な挨拶はするけれども、己れにはま  
だ安心のならぬ所がある。モウ己れも今生の別れぢやほどに、念の爲めに一  
々尋ねて置かなければならぬ。それは何であるかと云ふに、若し忽ち人有つ  
て尊公に向ひ、正法眼藏付囑の端的は何うぢやと問うたら、どのやうに答へ  
るつもりであるか」

實に臨濟は法の爲めに身を忘れ、一噛に咬まるゝをも厭はず、人情を離れての  
爲人である。それでこそ正法眼藏の眞面目が現はるのである。流石は三聖の  
然禪師、此の時下腹にウンと力を入れて

「喝ッ」

とやつた。これが正法眼藏の脱體露現である。この一言を聞いて臨濟が  
「やれ／＼あれの眼はこの三聖といふ目つぶれ馬のため、滅茶々に踏み潰さ  
れて仕舞つた。諸人これを知つたかドウぢやな」  
これは實に木杖を拗折する悪手脚とも云ふべき證明である。吾が眼藏を洗ひ浚  
ひ残らず三聖の爲めに奪ひ取られたと云ふ意味である。

### 僅々十七字の川柳

僅々十七字の川柳、よく人情の微を穿ち、巧みに世態の細を盡して居る。試



みに之れを列擧すれば、

義理

片袖をぬらすが義理のもあひ傘

寡言

我に口あるから壁に耳があり

自省

通りぬけ無用で通りぬけが知れ

不孝

御先祖に打死させて高枕

嫌疑

よくいうて悪くいはるゝ後家の髪

不和

目についた女房今は鼻につき

多辯

こゝぎりの話とやたらふれ歩き

嫁

よい口があれば宗旨が氣に入らず

孝行

目がさめて眠つた親を思ひ出し

慈愛

うたゝねもいつか着てゐる母の恩

其の他自警とすべく、又、教材ともするに足るものが多し。



### 臨濟真人の話

臨濟示衆云、有<sub>レ</sub>ニ無<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>眞人。常向<sub>二</sub>汝等<sub>一</sub>面門<sub>一</sub>出入。初心未證  
 據者看<sub>レ</sub>看<sub>レ</sub>時<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>僧問<sub>フ</sub>如何<sub>ナ</sub>是<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>眞人<sub>一</sub>。濟下<sub>二</sub>禪牀<sub>一</sub>擒住<sub>二</sub>這僧<sub>一</sub>  
 擬議<sub>ス</sub>。濟托開<sub>云</sub>無<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>眞人<sub>一</sub>是<sub>レ</sub>甚<sub>ク</sub>乾屎<sub>一</sub>穢。

臨濟大師が或る時大衆に示して曰く、

「未だ迷悟に落ちぬ無修無證の人があつて、常に汝等の口から出たり這入つたりして居る。初心にしてこの眞人を知らぬものは、急に看取するが宜しいぞ」と大呼した。大衆も斯う云はれて見れば、黙つても居られない。必ず何とか質問を發しなければなるまい。一僧あり、忽ち座より立つて





「階級に墮せぬものがあると云ふが、さう云ふものは何處にあるのだ」と問ひ出した。そこで臨濟大師は、その問ひ來る底はそも是れ何者ぞと云はぬばかりに禪床の椅子を下つて、其の僧を擒取、サアこれでも一無爲の真人に出つ喰はさぬと云ふか、文句があつたら何ぞ道はざると云つたやうな凄じい勢ひである。僧もそのやうに詰めかけられては、有とも無とも口を開くことは出来ぬから、頗る狼狽の體であつた。時に臨濟大師は此の僧を突つばなし、「無爲の真人などと云ふと、頗る貴いやうに聞えるけれども、其んなに貴いことも無いぞ、大便所のクソカキ楸と同じこと、イヤハヤ鼻もちもならぬものだ」と云つた。この臨濟のヤリ方は、少しもユルミがない。こゝが面白いところである。

### 木堂和尚の女郎買

木堂和尚は遠州新居町龍谷寺第九世の祖である。和尚或る年江戸に入らんとして、品川宿を通過した。時に突如として一樓より「木堂さん、遊んでいらつしやいよ」と云ふ女郎があつた。和尚顧みて曰く、「そもじは誰ぢや」  
女郎秋波一番、  
「私は和尚様の檀家、榊屋十郎の娘で御座んす。何卒助けろと思つて、今夜は



登樓つて下さいまし』

と云ふ。

『さうか、それでは泊つてやらう』

衣を着たまへ、女郎の室へ這入つた。和尚は室へ這入つたなり、床の間に向いて坐禪して動かない。然るに夜は森々と更け渡り、一更二更の鐘の響にサスガ晝を欺く高樓も、人静まつて時折り室に行き交ふ草履の音ばかり聞えるのであつた。女郎は遂に堪り兼ねたと見えて、

『和尚さま、どうぞおひげにして下さいませ』

と促した。和尚は肅然として、

『そもじは寝るが商賣、衲は坐禪するが商賣だ、衲にはかまはずと、ゆつくり寝るがよ』

と云つて、終宵女郎の枕頭に兀坐した。翌朝になつて勘定を問へば、

『五百文頂きます』

と云ふ。和尚即ち一朱の札を與へたところが、女郎は端錢二百五十文を出して

『和尚さま、このおつりは妾に下さい』

と云ふ。和尚眼を怒らして曰く、

『お前は其のやうな腐れ根性であるから、斯う云ふ墮落の淵に沈んで居るのだ。人間と生れたら正直でなければならぬぞ』

と大喝した。女郎恐縮して叩頭して居る内に、坊主はスタ／＼と出て行く。女郎狼狽し、

『和尚様、おつり……』

と云つて、後を追ひかければ、



「それはお前にやる」

と云つたまゝ、後をも見ずに去つて仕舞つた。

### 嚴陽一物の話

嚴陽尊者問、趙州一物不將來、時如何。州云、放下着。嚴云、一物不將來、放下箇甚。嚴州云、恁麼則擔取去。

嚴陽尊者と云ふは、洪州武寧縣の東南四十里に嚴陽山と云ふがある。趙州和尚の嗣法弟子の上首にて、諱は善信といふ、餘りに道徳の高い人にて、世人が其の名を稱するを憚り、嚴陽尊者と云つた。その嚴陽が趙州に問うて曰く、





「喜怒哀樂の未だ發せざる已前に承當し、我執法執をスツバリ丸裸になつた時には何うて御座りませうか、」

趙州曰く、

「エライ重いものを擔ぎ出したものだな、更にその一物をも放下しなくてはならぬぞ」

と千尋萬仞の斷崖から見事に蹴落した。嚴陽曰く、

「あれは柄はもうスツバリ放下し來つたと思つて居るのですが、此の上は何を放下するのであるか」

趙州曰く、

「その様に放下することが出來ないならば、仕方がない、其のまゝ擔いで行かれたがよろしからう」

この一言、殺人刀もあり、活人劍もある、實に嚴重な提撕である。

### 武士大根を曳く

何事も心は大丈夫でなければならぬ。今から言へば古い話、ある田舎で狐が出て人を化かすといふ噂がバツと廣がつた。ところが武術自慢の武士があつて俺が退治してやると言つて、そこへ行つて待つてゐた。すると十六七の器量のよい娘が來て、

「妾は向ふの村まで參るもので御座ります。どうぞ御一所にも連れなされて下さいませう」



と面はづかしげに頼み入つたが、武士はにつくき狐の仕業かなと聲あらゝげ、  
「太い奴、うぬは此のあたりに住んで人をたぶらかす狐であらう、あれが女好  
きだといつて、さう甘く化かされてなるものか、あきにせろ、出直せ〜」  
と叫ぶと、忽ち男に化けて、

「私は江戸の者、一人旅なれば何とぞ御同道を」と云ふ。

「うぬも今の狐に相違ない。よししろッ」と言ふと、爺になつて、

「もしも侍様」といふ。侍は、

「なんだ、ぢいに化けたか、古い〜」と言へば今度は婆になる。

「ばあても狐だ」

と言はれて仕様なさに狐になつた。侍は得意顔に、

「それ見ろ狐め、あのれ生捕になさて置くへさか」

と言ひながら追ひかけて行つた。狐はとても叶はないと逃げは逃げたが、追ひ  
詰められて簀の中へ飛び込もうとした時、侍は狐の尻尾を引捕へグツと引く  
と、尻尾は譯もなく抜けて狐はコン／＼クワイ／＼と鳴きながら、姿をかくし  
て仕舞つた。侍はさてこそ見せしめに是れを土産にして立ち歸らうと二三歩  
行つたと思ふ後ろから、

「旦那なぜ大根を抜いた」

と罵つた。武士はかうして又狐に化かされて居たのである。



### 巖頭拜喝の話

巖頭到<sub>リ</sub>徳山<sub>ニ</sub>跨<sub>レ</sub>門<sub>ニ</sub>便<sub>テ</sub>問<sub>フ</sub>是<sub>レ</sub>凡<sub>カ</sub>是<sub>レ</sub>聖<sub>カト</sub>山<sub>ニ</sub>便<sub>テ</sub>喝<sub>ス</sub>頭<sub>ニ</sub>禮<sub>ス</sub>拜<sub>ス</sub>洞山<sub>ニ</sub>問<sub>フ</sub>云<sub>ハ</sub>、  
 若<sub>シ</sub>不<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>密<sub>ニ</sub>公<sub>ニ</sub>大<sub>ニ</sub>難<sub>ニ</sub>承<sub>レ</sub>當<sub>ス</sub>頭<sub>ニ</sub>云<sub>ハ</sub>洞山<sub>ノ</sub>老<sub>シ</sub>漢<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>識<sub>ス</sub>好<sub>シ</sub>惡<sub>シ</sub>我<sub>ニ</sub>當<sub>ス</sub>時<sub>ニ</sub>一  
 手<sub>ニ</sub>擡<sub>テ</sub>一<sub>手</sub>捺<sub>ス</sub>。

巖頭和尚と云ひ徳山和尚と云ひ、何れ劣らぬ禪門の高士、此の高士と高士との相見、果して奈何事を仕出かすであらうか、即ち巖頭和尚が或る時、徳山和尚を訪問した、玄關の戸をガラリと開き、門を跨いて大聲に「是れ凡か、是れ聖か」





とやつた、一體人生諸般の問題は甲乙の二つが相對する處に生ずるもので、賢者があるのて愚物が出来、凡人があるのて聖人たることが出来る、處が甲に對して凡人が乙に對して聖者の事もあれば、丙に對しての聖人が丁に對して凡人である事もあるから、一概に凡とも聖とも決定して仕舞ふわけには行かない、此の無圖かしい問題を捕へ來つて「是れ凡か是れ聖か」と質問した巖頭和尚は却々質が悪い、然るに質問せられた徳山は左るもの、凡とも云はねば聖とも云はず、玄關の障子もびり／＼裂けるやうな大聲で

「喝!!」

とやつた、是を見た巖頭、徳山の「喝」に對して是とも云はず非とも云はず忽ち禮拜した、此話を或者が洞山良介和尚に告げ知らせた、すると洞山が大層讚めそやし「それは何うも近頃氣味良い話してある、徳山も徳山であるが、豁

公（巖頭）も豁公である、外の者ならば逆もその一喝を聞取ることには出来ないのであるが、豁公なればこそぢや、其一喝を聞き取つて承當したのである」と。其の傳言奏語の者が洞山和尚の評語を聞いて餘り讚め方が變だから、後日に至り巖頭に向ひ、

「洞山禪師は貴僧のことを斯く／＼に讚められましたぞ」

と申した、すると巖頭はまだ洞山の舌頭に載せられて居るとは氣が附かず、思はず本音を吹出し

「いや何うも洞山老漢は此方を見損うて御座るから其んなことを云はるゝのてある、左様も滅茶々に讚めらると云ふは好悪を知らぬからぢや、我れ巖頭は、實は其の時には一手擡一手捺で、一手は肯ひ、一手は肯はなかつたのぢや、」



### 本多忠勝の辭世

徳川家康の臣に、本多平八郎忠勝と云ふ者があつた。徳川氏四天王の一人と稱せられて、頗る勇士であつたが、病いよく革まつて、やがて臨終も迫つた時、一族縁者一同は、その枕邊に寄り集つて、

「何か遺言はありませぬか」と尋ねると、

「別段云うて置く程の事はないが、辭世を一首遺さう」というて、

「死にともな、ア、死にともな、死にともな」と、和歌の上の句を詠んだので、其の座に居た子供等までも鬱ぎ、日頃勇士よ、豪傑よといはれた父上が、臨終の際に、死にともなとは何事ぞ、病氣の爲めに氣が狂うて、こんな情けない事を言ひなされるのか、一族の者の手前も愧かしいと思つて、下の句を待つてゐると、

御恩を受けし君を思へば

と附け加へたので、一座の者は思はずハツと顔見合せて、感激の餘り一語を發するものなく、熱い涙をそそいだと云ふことである。成程、これはさうあるべきことである。たゞ上の句を聞いたゞけては、如何にも忠勝が男らしくもなく、未練なやうであるが、下の句を聞くに及んで、眞實忠勝の勇士たる面目が現はれ、活きた教訓を示したのである。





二四〇

死にともな、あゝ死にともなく御恩を受けし君を思へば  
 人は誰れでもこの心掛けがなくてはならぬ、命は少しも惜まぬ、何時でも捨てるを厭はぬが、其の代り無益にたゞわけもなく失うてはならぬ。これぞ誠に佛陀の不惜身命の主旨である。

### 達磨廓然の話

梁武帝問達磨大師如何是聖諦第一義。磨云廓然無聖。帝云對朕者誰。磨云不識。帝不契。遂渡江至小林面壁九年。

武帝が達磨大師に斯う云つて問うた。



「聖人の諦められた第一義の所は、何う云ふもので御座る」

この問語は餘程敬意を表して問うたもので、普通一般の問答と思つては間違ふ。時に達磨が答へて云はく、

「イヤ、武帝ドノ、迷悟凡聖の音沙汰あるは第二義門頭の事にて、對待の法て御座る。第一義絶對のところは、ホガラカにして、その聖人といふものすら有りは致しませぬぞや」

達磨は斯くも真情を盡して、腹一杯のところを吐露されたけれども、武帝は達磨の答へた真意が解らなかつた。それで

「イヤ貴僧は無聖だと云はるゝけれども、現に此方に對面して居る其許は何人てあらう、」

武帝は下らぬ理窟を云ひかけた。武帝は實に狂狗土地を逐ふとも云ふべきであ

る。又指を標して月と作すともいふべきであらう。土地に噛みついたり、天上の月を見ずに指に目をつけたからとて何の役にも立たぬ、何故なれば只達磨の語尾に付き廻つて言外領略の宗旨を知らぬからである。武帝が餘りに下らぬことをいふから、更に一棒頭を與へて、

「イヤ最も陛下とは話しが合はぬ、柄は一向に識らぬ」

と云つた。斯う云ふと妙に刎ねつけられた様にも聞ゆるが、又廓然無聖第一義の當躰は無言無説無示無識にして、諸の問答を離るゝと云つたやうにも聞える。然しドウしても武帝と達磨とは、杓子定規で、その所見が違つて居るから、ピッタリと契合しない。ドウも提燈と釣鐘との様なもので釣合が悪い。達磨も武帝をなぶりに來たのではない、武帝もドウにかして佛法の極意が知りたと思ひ、達磨もドウぞ佛心印を傳へたいと思はれたけれども時節因縁が到來



しなかつたから、トウ／＼梁の國を去り、揚子江を渡つて魏の國の嵩山少林寺に至つて九年間面壁打坐して、心印傳授の時節を待たれた。

### 何をくよく／＼

何をくよく／＼川傍やなぎ

水の流れを見てくらす

俗語子は斯う諺つて人生を達観し得ない人を嘲つたが、彼の川傍柳を見るに、風東より吹けば西に搖れ、西より吹けば東に動いて、風のままに／＼動搖して止まず、水の流れを見ては、其の日／＼をくよく／＼と送つて居る。人間も其の通

りて、一定の見識なく、世の毀譽褒貶に伴れて、昨日は東、今日は西といふ無定見の生活をして日々を送つて居るものが多くは無からうか。思ふに人生を達観し得ない者は、多く彼の川傍柳の如くくよく／＼として、毎日悲しんで居るやうである。古人は、

『人生は、心の表現である』

とも云うて、吾等の心の持ちやう一つて楽しくも見え、悲しくも見ゆる事を教へたが、

とかく御覽よ浮世はかじみ

笑ひがほすりや笑ひがほ

て、笑ひ顔を以て人生に對すれば、人生は面白可笑しく見ゆるのである。吾等  
は出來得べくんば、笑ひ顔して人生を楽しく送らうてはないか。



### 南陽淨瓶の話

僧問「南陽、忠國師、如何是、本身、盧舍那、國師、云、與、我、過、淨瓶、來、僧、將、淨瓶、到、國師、云、却、安、舊、處、著、僧、復、問、如何、是、本身、盧舍那、國師、云、古佛、過去、久矣。」

慧忠國師は支那で有名な大善知識である。この慧忠國師の許へ、或る僧があつて、

「本身本佛の盧舍那佛といふは、一體何う云ふ佛であらうか」と質問した。すると國師は

「尊公水を持つて來さ」





諱に觸れずして、自身の盧舎那を指示して居る。然るに此の僧は何のやうに聞いたものであるか知らぬが、私の質問とはマルキリ違ふやうであるとも云はず、

「ハイ〜」

と國師の口車に乗せられて瓶に水を持つて來た。恰憫の漢であるならば、すぐに淨瓶を國師の横面に叩き付けるのであつたらうに、この僧はまだ初心者らしい。國師云く、

「舊と在つた處に置いて來す」

それでもこの僧はまだ氣が附かずに居る。郵便脚夫のやうに云ふがまゝに、歩いて居る。實に氣の毒なものである。アレ程國師は親密に自身のルシヤナを説明して居るのだけれども、一向に知らぬ、それで再び、

「イヤ方丈様、御用は御用として先刻お問ひ申したルシヤナと云ふ御佛は何處に居らるゝので、ドンな相好をして居るので御座るか」  
彼方へ行つたり、此方へ來たり、此の僧は何をウロツいて居るのだらう。國師曰く、

「ウン納はまた處々身處々現の今現在說法する活佛の事かと思つて居たのだ  
がさうでない、お釋迦様の說法の會座に紹介された古佛のことを質問したのか、それならもうズツの昔、釋迦出世以前過去世の時死んで仕舞つて居るぞ」

と云つた。この過去とは何處か、こゝが參究の仕どころであらう。



### 小僧の豆腐買ひ

山寺の和尚さんが豆腐を好きで、降つても照つても、毎日小僧さんを豆腐買ひにやつた。すると其の通路に小店があつて、店の隠居さんが、毎日店先きに退屈そうに坐つて居る。其處へ小僧さんが來ると、隠居さんは退屈紛れに小僧を捕へて問答をやる、

「オイ小僧何處へ行く」

小僧曰く、

「町へ行く」

隠居問ふ、

「町は何處へ行く」

小僧答へて曰く、

「豆腐屋へ行く」

之は一度で分ることであるが、隠居さんは退屈して仕方がないものだから、毎日小僧の來るのを待つて、この問答が濟まぬと通さぬ。然るに小僧は毎日やられるので、蒼蠅くて堪らぬ。能い加減に止めて呉ればよい、困つたものだ、自分の師匠の用事であるから、嫌と云ふこともならず、何とかして隠居の間を免れる工夫があるまいかと、一日和尚さんの前へ行つて、事情を打明けて、和尚さんの智慧を借りた、すると和尚の云ふには、

「それでは隠居が、何處へ行くと問ふたら、身體は町へ行くが心の向ふところ



は他だと答へよ、隱居が他とは何處だと問ふたら、西方に行くと答へよ、すると西方は何處だと問ふに相違無いから、極樂と云へ」

### 東印請祖の話

東印度國王。請二十七祖般若多羅。齊王問曰。何不看經。祖云。貧道入息不居。陰界出息不涉。衆緣常轉。如是經百千萬億卷。

東印度の國王が二十七祖般若多羅を請じて、お齋を供養した。請待された時には必ずお經を讀むことになつて居る。普通の僧侶はみな呪願回向をするのに尊者獨りは御馳走になつたばかりで一向に讀經回向がない。ソコで王は怪しん





て

「他の坊主は皆ち經を轉讀するのに、貴僧に限つて轉讀されないのは、何う云ふ譯であるか」  
と不審した。祖云く

「此方の入息はナ、決して此の妄想界には居らぬ、此方はナ、觀自在と同じく五陰は皆空なりと照見して、一切の苦厄を度し、一切の顛倒夢想を遠離して、大涅槃の境界に安住して居りますから、御不審は御無用である。又拙僧は是くの如く三昧境に入つて居りますから、別段に看經するの必要は御座らぬ。此の三昧に遊化して、一切の萬境に執着しないのが究竟無爲の深般若である。拙僧は世の無知なる坊様とは違ひ、お齋に逢ふたとさのみ、名聞らしく看經こそ致さぬ、從晝至夜、常住無間斷に、是くの如き甚深の般若波羅密多

經を轉讀して怠りませぬ。却々一卷や二卷ではない、百千萬億無量無數の大經卷を轉じて居ります、その音聲は三千大千世界にひびき亘つて居る筈ぢやが、失禮ながら陛下の御耳には達しませぬか」  
實に手強い御返答である。これにはサスの國王も二の句が出なかつたであらう。

### 一指頭の禪

具胝と云ふ和尚は、他の人から如何なる質問を受けても指を一本ニユツと立てた。如何なるか是れ佛法の大意と問はれても指一本ニユツ、如何なるか祖師



西來意と問はれても指一本ニユツ、何でも蚊でも指一本ニユツと立てるのだ。  
ところがその弟子の小僧も和尚の風を真似て、豆腐屋が來ても、參詣人が來ても指一本ニユツと立てる。それで或信者が頗る腹を立て、和尚にこのことを語つた。其處で和尚は小僧を呼び出して、

「コラ小僧、お前は何故おれの真似ばかりをするのだ、全體何と考へて其んな真似をするのだ」

と云ふと、小僧は何とも云はずに、指をニユツと立てた。和尚はイキナリ飛びかゝつてその指を缺てチヨンと切つた。小僧は痛い〜と叫びながら、その時に初めて悟ることが出來、爾後は何を云つても、指の無い指をニユツと立て、學人に示した。

### 雲巖大悲の話

雲巖問ニ道吾ニ大悲菩薩用ニ許多手眼ヲ作廢シ吾云ク如三人夜間背手摸ニ枕子ニ巖云我會也吾云汝作廢生會巖云徧身是手眼。吾云道即大成道即得ニ八面。巖云師兄作廢生。吾云通身是手眼。

雲巖と道吾とは兄弟同志である。即ち雲巖が道吾に向つて、

「彼の千手觀音は、手が千本、眼も千眼あるやうだが、あれは全體何の用にするのであらうか。一時に使ふのであらうか、別々に使ふのであらうか、普通の菩薩や佛は手が二本に眼が二ツ許りある、まるで妖怪でも見たやうである





「がそれとも亦別の道理があるのか、畢竟何うだ」

道吾答へて曰く、

「左様サ、マア譬へて見やうなれば、夜中に枕をすり外して、後手に探ることがある。其の時は眼と手と一時に用ふるであらう、マアあんなものと思つたら宜しからう」

雲巖曰く、

「ウン、夫れならば善く解りました」道吾曰く、

「ソソなら、どのやうに解つた？」

雲巖曰く、

「自分の見地からすれば、頭上から脚下に至るまで、スツペリ手眼であるから、千手千眼とても萬手萬眼とても申すへきである」



道吾曰く、

「イヤ、随分甘いことをいふが、まだく少し足らぬ所があるやうに思はれる」  
雲巖曰く、

「衲は自分だけの意見は述べたが、それとても足らぬとあれば、今度は尊公の  
説を承はらうか」

道吾曰く、

「八面玲瓏、通身が千眼である」

草の名も所によりて替りけり難波の蘆は伊勢の濱萩とは何とて御座る。この二人の見所は確かに、ハマグリとグリハマとの相違、はうべたとべたはうとの相違だ。

### 百丈和尚の作務

百丈と云ふ和尚は有名な禪僧であるが、作務するに必ず大衆と一所にやつた。一日二日するなら兎も角く、毎日となると中々やれぬものだ。小僧の掃除の仕方が悪いと云つて、散々叱り飛ばして、その癖御自分は行持もせずにお大黒と床の中でイチヤつくやうな坊主は澤山あるぢや。ところが百丈和尚は、常に大衆と一所になつて、鍬を取つたり、鎌を持つたりして、作務すると云ふのだから感心せざるを得ない。それも若い時ならよいが、八十にもならうとする老人で猶ほ此の大元氣である。大衆は見るに見兼ねて大協議を開き、結局和



尙の鍬を隠して仕舞つた。然るに百丈和尚は其の日から膳を進めたが一向に箸を取らぬ。遂に三日も食はぬ。其處で大衆も師匠の志の強固なるに感じ鍬を舊の場所に置いたすると百丈和尚は欣然として、鍬を肩にして堂の後に行き、畑を耕して室に這入つた。今度は膳を進むるに、箸を取つて喫却すること平生の如くであつた。弟子合掌して問ふて曰く、

「和尚は食はないこと三日、何が原因で食せないのてあるか」  
時に百丈和尚童顔に微笑して曰ふには、

「イヤ、おれの主義は一日作さざれば一日食はざるの主義である」

と云つた。此の勇猛不退轉の行持、實に擲すべきではないか。「一日不作、一日不食」實に現實社會に向つては一大清涼劑ではあるまいか。

### 雪峯飯頭の話

雪峯在德山作飯頭一日飯遲德山托鉢至法堂峯云道老漢鐘未鳴鼓未響托鉢向甚處去山便歸方丈峯舉似巖頭云大小德山不食未後句山開令侍者喚巖頭問汝不肯老僧那巖遂啓其意山乃休去至明日陞堂果與尋常不同巖撫掌笑云且喜老漢會未後句他後天下人不奈伊何

雪峯和尚が徳山禪師の會下にあつて、飲炊き番となつた。ところが或る日のことであるが、飯時になつても仲々飯が出来ない。それで徳山は未だ飯が出来たと云ふ知らせの鳴らしものをせぬ内にノコノコと應量器を提げて僧堂に赴か



うとして、法堂の前まで獨り手に出かけられた、これを遙かに見た雪峯は、  
 「コレ方丈、何を今時ウロ／＼して居る、まだ飯が出来たと云ふ知らせもせぬ  
 うちに、飯椀を持つて何處をウロ／＼して居るのだ、明け方の幽霊なら出直  
 せ〜」

と叱つた。徳山は斯う叱られて、強に逢ふては弱と、スラリと身を轉じ、一言  
 も及ばずして歸方丈した。其時雪峯の師兄に當る巖頭も矢張り同參で徳山の會  
 にあつた、そこで雪峯は其のことを巖頭に物語つた。巖頭もナカ／＼油斷はな  
 らぬ。大に驚いたやうな容をして、

「サスの徳山も未だ惜しいことには、末後の句を御承知なかつたぞ、イヤハ  
 ヤ惜しいものだ」

實は徳山と巖頭とは、腹が一つであるから、百も承知二百も合點だけれども、





徳山は侍者をして、巖頭を喚び來らしめ、

「お前は私の云つたことを何故否定したのだ」

と云つた。それで巖頭は徳山の耳もとに進んで、ヒソ／＼と其の旨を物語つた。惚れた同志は目付きて知れる、徹山は忽ちその旨を悟つて其處を去つた、そして明るる日は、平生と様子が違ふやうであつた。そこで巖頭が手を拍つて大笑し、

「マア宜かつたワイ、前日は解らなかつたが、今日は會得が出來たやうぢや、」  
もう最後の句を會したから、ドンな人が出て來ても、徳山を動かすことは出來ない。と云つて喜んだ。

### 俳人芭蕉の花見

俳人芭蕉が或る年の春、花を吉野に見ようと思つて發足すると、偶々大和國高市郡武内村に孝女某があると聞き、道を枉げて其の家を訪ひ、深く其の孝養に感じ、且つ其の窮乏を憐み、路銀の一兩を出して孝女に與へて立ち去つた。それで彼は折角の吉野へ花見に行くことが出來ず、空しく歸路に就くと、途に友人と會ひ、

「吉野の花は如何であつたか」

と訊ねられ、實はこれ／＼と孝女のことを語つた。その友人が



「平生吉野の花に憧がれて居られたのに、それでは残念であつたらう」と云ふのに、芭蕉は、

「私の吉野に遊びたいと云ふのは、たゞ花の美を見たいためであつた、幸にして人の心の美を見ることが出来た、春はまた来るに依つて、決して残念とは思はぬ」と云つた。

### 鹽官犀扇の話

鹽官一日喚侍者爲我過犀牛扇子來者云扇子破也官云

扇子既破還我犀牛兒來者無對資福畫一圓相於中書一牛字

鹽官和尚といふは支那杭州縣鎮國海昌院齋安禪師の事にて宣宗皇帝より悟空禪師と追諡せられた卓拔の善知識である、犀牛の角を以て其の骨を拵へた扇子が當時用ひられて居たが、或る日鹽官和尚、侍者を喚んで「コレ侍者和尚今日は餘程暑いから犀牛の扇子を持ち來れ」と命じた、平生底の事に托して何となく言葉を掛けて見られたのである、併し此の言便に探竟あることを聞き取らねばならぬが、侍者は何時もいたであらう乎。

「イヤ其の扇子は破れて了ひました」と、侍者の返答、そこで鹽官は



「左様か既に破れて仕舞つたならば仕方が無いが、併し其の骨は残つて居るであらうから夫れなりとも持つて来て呉れ」

と云はれた、處が侍者は何とも答へない、併し此の無對の處に妙味がある、一體、破扇子を持つて来いとは無理な注文である、此の無理な注文に對しては答ふるの必要がない、既に破れて用をなさぬのぢやもの、何うして其の骨が残つて居るものか、骨も皮もスツカリ寂滅ぢや、維摩の默然、只だ一本の破扇子、併し、つて悪く見れば頑然無離で龍頭蛇尾である、何うも侍者の無對は餘り善くも見られない、傍に見て居た資福和尚、侍者の無對を見て少しく遺憾に思はれたものと見え、見るに見兼ねて侍者に代り鹽官の需めに應じられ、一の〇を書いて中に一箇の「牛」と云ふ字を書かれた、併し侍者の破扇も趙州の無字と同じく妙味を含んで居る、含んでは居るが猶ほ是れ片足ぢや、資福の圓牛





二七二  
徳山和尚の  
て初めて兩足完全になつた、

### 徳山和尚の大悟

徳山和尚はもと金剛經の講義坊主であつた。それで南方に禪學が盛大を極めてゐるのが、頗る氣に喰はなかつた。それで一つ彼等を回ましてやらうと云ふので山のやうに金剛經の參考書を背負つてやつて來た。斯くて途中で餘り勞れたものだから、茶店に休んだ。そして茶店の婆さんに、「餅を一つ賣つて呉れ」と頼んだ。ソコで茶店の婆さんが、チロリと徳山の足許を覗んで、

「若し、旅のお坊さまへ、その背中に山のやうに擔つて居るものは、甚麼の書物で御座んすぞへ」と問うた。徳山は忽ち小鼻をウゴメかして、

「ウン、これか、これはみんな金剛經の參考書ぢや」と得意満面である。この一言を聽いて婆さん膝を進めて曰く、

「金剛經の達人であるとなれば、此の婆さんに質問が御座る、金剛經の中に、過去心も不可得なり、現在心も不可得なり、未來心も不可得なりと云ふ文句があるが、全體お坊は何の心を以て餅を食はんとするので御座んすか」

眞甲から斯う問ひ詰められて、サスの徳山もグツと詰つて仕舞つた。ウンともスンとも云ふことが出来ない。忽ち荷ひ棒のシワつたやうに口をへの字にシめて黙して居つた。然し徳山も後に禪界の霸王と唱へられる程の男であるか



ら、イヤこれではならぬと気が附いた。そこで

「婆さんよ、お前はなか／＼やりてだ、然しお前のやうな婆さんがあるからには、定めて此の近くに立派な禪匠が棲んで居ることであらう」

と問うた。婆さん答へて曰く、

「こゝから五里ばかり行つたとろに、龍潭と云ふ偉い禪坊さんが居るぞへの」と云ふ。かくて徳山は婆さんに道を教へられて、龍潭のところへ行き、門を跨いで便ち問うて曰く、

「久しく龍潭と響く、到り来るに及んで、潭も見えず、龍も亦た現ぜず」

と切り込んで行つた。實に此の見識は恐ろしいものである。時に龍潭は屏風の後に立つて身を引いて曰く、

「汝龍潭に到れり」

其の内に日も没して夜になつて、徳山は何時までグヅ／＼して立たないものであるから、龍潭が

「夜が更けた、サア歸れ／＼」

と云うた。そこで徳山は

「ハイ」

と云つて頭を下げて暇請して簾をかゝげて外に出たが、外が餘りに闇いので立ち戻つて、

「どうも外が餘りに暗う御座る」

と云つた。龍潭は、

「そんなに闇いか、それでは是れを持つて行くがよからう」

と紙の縫つたものを油にしめし、その先きに火を付けて渡さうとした。徳山尙



和が

「これは有難う」

と一禮述べ、潭の呉れた紙燭を採らうとするトタンに、龍潭はフツと其の火を吹き消して仕舞つた。斯くて徳山は此の燭をフツと吹き消したところで、忽ち大悟することが出来た。

龍潭問うて曰く、

「子箇の甚麼の道理をか見る」

時に徳山は初めて眠りから醒めたやうに感じたらしく、

「今日までは即心即佛と説くなどは、禪魔の言だと思つて居りましたが、今日只今始めて目が醒めました、是れからは決して疑ふやうなことは致しませぬ」

ぬ

とあじぎした。目が醒めるにも疎細淺深がある、が徳山は所謂桶底を脱したのだ。實に三日相見せずんば、舊時の漢となすなかれとは眞理である。サテその翌日になると、龍潭が高坐に昇つて斯う賞めた。

「この中に偉い漢が居るぞ。牙は劔樹の如く、口は血盆に似たり、一棒に打つども頭を回らさず、他時異日孤峰頂上に向つて、吾が道を立てるに相違ない」

龍潭もうれしいまゝに、ほめるは、餘りホメ過ぎて醜きことを忘れたやうだ。徳山は斯う高坐で披露された途端に、スツと立つて、是れまで虎の子のやうに大切にしていた金剛經の参考書を、ズツと高く差し上げて、

「諸の玄辨を窮むるも、一毫を大虚に致くが若く、世の樞機を竭すも、一滴を巨壑に投ずるに似たり」と云つて、火に投じて焼いて仕舞つた。



### 南泉石佛の話

南泉、願禪師因陸亘大夫問曰弟子家中有二片石亦曾坐亦曾臥如今欲銷作佛也還得麼泉曰得陸曰無不得麼泉曰不得不得

南泉の弟子に陸亘大夫と云ふ居士があつたが、或る時師匠の前へ行つて云ふには、  
 「拙者は一つの石を秘藏して居るが、それが不思議なことには、その石が普通の人のするやうに、寝たり起きたりして居るぞ」





と云つた。實に珍らしい石もあつたものだ。人間並に起き臥しをすると云ふから、やはり飯も食ふだらうし、糞もひるだらうが、若し斯んな石が今日あつたら、淺草の見世物にすると大入叶だ。そこで大夫がまた言葉を續けて、  
 「それではあまり珍らしい石だから、一つ鑄つて佛を造らうと思ふが、はたして甘く行きませうかしら」  
 斯う云ふところを見ると、何うやら大夫自身がその石らしいぞ。時に南泉答へて曰く、

「オ、それは出来るとも大出来さ」

まかり違つて大夫に玄翁で、コチンとやられると困ると思つたか、斯う答へた。大夫餘程の意地悪と見えて、

「どうあつしやるが、出来ないと思ふが如何で御座る」

すると又南泉が

「ウム、なる程、それは出来ぬ、どうしても出来ぬ」

と答へた。南泉の舌の先には骨がないと見える。右から來ても、左から來ても、その大石を一向手許に寄せつけずに手だまに取つてゐるところが面白い。

### 伯牙と鐘子期

支那に伯牙と云ふ琴を弾する名人があつた。處がこの人の友達に鐘子期と云ふ琴を聞くことの上手な人があつた。伯牙は喜んで琴を弾するのであつたが、伯牙一たび琴に向ふて山岳の曲を弾するや、鐘子期は黙して聞いて居たが、



「巍々乎として泰山の如し」

と云ふ伯牙が河川の曲を弾じ初めると、鐘子期は直ちに、

「洋々乎として大河の如し」

と批評する、弾き手も名人、聴き手も名人、然るに鐘子期一度死するや、伯牙は琴糸を断ちて、遂に再び琴を手にせなかつたといふ。琴は自ら弾じて自ら樂んだら良さそうに思ふが、自分だけでは満足が出来なかつた。眞に自分の琴を聴いて呉れる人がない位なら、寧ろ断琴するに如かずと考へたのである。

誰に見せよとて紅かねさそい

みんなお前に心中だて

誰かに見てもらひたい、他にほめられて、それで満足するのは、人間萬事に於ての通有性かも知れない。

禪窓奇譚 終



不許複製

大正七年十一月五日印刷  
大正七年十一月十日發行

著者 池上文僊

發行者

增田義一

東京市京橋區南紺屋町十二番地

印刷者

佐久間衡治

東京市京橋區西紺屋町廿七番地

譚奇窓禪

—定價金壹圓—

發行所

東京市京橋區南紺屋町十二番地  
實業之日本社

電話京橋 八七四、八七五  
八七六、八七八

振替口座東京三二六

株式會社秀英舎印刷



□ 力の生 活 文學博士 前田 慧雲先生著 定價八十五錢 郵稅六錢 四六判總布

□ 覺 路 文學博士 前田 慧雲先生著 定價壹圓廿錢 郵稅八錢 三六判總布

□ 信仰に至るの道 權田 雷斧現下著 定價七十五錢 郵稅六錢 四六判總布

□ 人 . と 教 再版 本多 日生現下著 定價一圓廿錢 郵稅八錢 四六判總布

□ 鍊 膽 術 第廿一版 日置 默仙禪師述 定價五十五錢 郵稅四錢 三六判總布

□ 一 棒 一 喝 禪書洞 池上文僊先生著 定價六十五錢 郵稅六錢 三六判總布

□ 禪 と 健 康 陸軍中將 堀内文次郎先生著 定價六十錢 郵稅六錢 三六判總布

□ 徹 底 論 七版 加藤 咄堂先生著 定價一圓八錢 郵稅八錢 四六判總布

□ 威 力 生 活 再版 三生坊道人著 定價七十六錢 郵稅六錢 三六判總布

□ 禪味趣味滑稽逸話 の 種 五版 湯朝 觀明先生著 定價七十六錢 郵稅六錢 三六判總布

□ 縮 刷 修 養 農法學博士 新渡戸 稻造先生著 定價一圓八錢 郵稅八錢 三六判總布

□ 縮 刷 世 渡 り の 道 農法學博士 新渡戸 稻造先生著 定價一圓廿錢 郵稅六錢 三六判總布

□ 自 警 農法學博士 新渡戸 稻造先生著 定價一圓廿錢 郵稅十二錢 菊判總布

□ 一 日 一 言 農法學博士 新渡戸 稻造先生著 定價六十五錢 郵稅四錢 三六判總布

□ 青 年 と 修 養 第十版 實業之日本社長 增田 義一 著 定價一圓廿錢 郵稅十二錢 菊判總布



□海

へ 五版 島崎 藤村先生著

定價一圓卅錢  
三六判美本

□現代之藝術

再版 文學博士 上田 敏先生著

定價一圓卅錢  
四六判總布

□渡り鳥日記

三版 文學博士 松本亦太郎先生著

定價二圓卅錢  
四六判總布

□社會と自分

十四版 夏目 漱石先生著

定價一圓卅錢  
三六判總布

□人性論

三版 醫學博士 永井 潜先生著

定價二圓卅錢  
菊判總布

□哲學と文藝

再版 文學博士 桑木 嚴翼先生著

定價一圓卅錢  
四六判總布

□文明の末路

五版 イ・ドネリイ氏原著

定價一圓  
四六判總布

□江戸俠客物語

三版 坪内、三上兩博士序 林 和先生著

定價九角  
四六判總布

□俳句とはどんなものか

十七版 高濱 虚子先生著

定價四角  
四六判上製

□俳句の作りやう

十六版 高濱 虚子先生著

定價五角  
四六判上製

□俳句と自分

三版 高濱 虚子先生著

定價四角  
三五判上製

□進むべき俳句の道

高濱 虚子先生著

定價一圓十錢  
四六判總布

□月並研究

再版 高濱 虚子先生著

定價一圓  
四六判總布

□鳴雪俳句鈔

四版 内藤 鳴雪翁著

定價卅五錢  
三五判上製

□新選俳句大觀

三版 霜山・落魄居共著

定價八十五錢  
菊判大册

□俳人子規

再版 木下 春雄先生著

定價八十錢  
菊半載總布



- 英國戰時の努力 再版 英國ウオード女史著 定價一圓八錢 郵稅八錢 總布
- 軍 談七版 故海軍中將 秋山真之閣下述 定價一圓八錢 郵稅八錢 總布
- 波上の日 本六版 海軍大學校長 佐藤中將閣下述 定價一圓八錢 郵稅八錢 總布
- 祖國を顧みて 九版 法學博士 河上肇先生著 定價一圓八錢 郵稅八錢 總布
- 實地視察 寶庫西伯利 三版 法學士 野守廣先生著 定價一圓八錢 郵稅八錢 總布
- 日本警語史 新刊 伊藤銀月先生著 定價一圓八錢 郵稅八錢 總布
- 新しい言葉の字引 新刊 服部嘉香先生共著 植原路郎先生著 定價一圓八錢 郵稅八錢 總布
- 大統領ウイルソン 再版 田中達先生著 定價一圓八錢 郵稅八錢 總布

本週二出 紀念十年 英傑傳叢書 愈發熱的 狂賣大迎

ワシントン <small>既刊 矢代文學士 井上文學士</small>	フレデリキ <small>新刊 煙山專太郎</small>
ビスマルク <small>既刊 法學博士 蜷川新</small>	リンコルン <small>未刊 文學士 内ヶ崎作三郎</small>
ルーテル <small>既刊 村田勤</small>	ネルソン <small>未刊 法學博士 平沼淑郎</small>
クロンウェル <small>既刊 慶應教授 戸川秋骨</small>	カブール <small>未刊 文學士 阿部秀助</small>
ペートル <small>既刊 早大教授 曙夢</small>	少ピット <small>未刊 永井柳太郎</small>
ナポレオン <small>既刊 長瀬鳳輔</small>	グラッドストーン <small>未刊 文學士 小山東助</small>

□ 全部十二冊 定價各冊二圓 郵稅各冊十二錢 菊判總布大冊美本 津田青楓畫伯裝幀全部十三卷前金直接御註文の方と限、二拾圓送料不要

□ 偉人の言行は以て吾人に發奮の動機を與へ、英雄傑人の事蹟は以て時代の背景を語る、本叢書は是れ實に出版界の一大驚異也



□ 桂月學生文範

三册

再版

大町 桂月先生著

定價各册  
六判總八  
布錢圓

□ 小品 蒼

空

再版

高須 梅溪先生著

定價六  
半稅六  
菊裁總  
布錢錢

□ 小品 銀杏の葉蔭

十二版

茅原 華山先生著

定價五  
六稅六  
三判總  
布錢錢

□ 半 生の懺悔

三版

茅原 華山先生著

定價七  
六稅六  
三判總  
布錢錢

□ 黎 明

再版

茅原 華山先生著

定價一  
四稅八  
四判總  
布錢錢

□ 江戸むらさき

三版

文學士 笹川 臨風先生著

定價一  
四稅八  
四判總  
布錢錢

□ 易の原理と其應用

四版

法學士 細良 正邦先生著

定價一  
三稅八  
三判總  
布錢錢

□ 向陵より社會へ

再版

第一高等學校教授 畔柳 都太郎先生著

定價一  
四稅八  
四判總  
布錢圓



325  
3/7



終

